総合都市研究　第52号　1994

母親の友人関係と教育文化
― 関係財としての友人関係の考察 ―

1．問題関心
2．友人関係と教育文化
3．教育文化と地域関心の構造
4．地域の学歴階層特性と教育文化
5．結語

立　山　徳　子*
森　岡　清　志**

要　　約

本稿は、母親の教育投資行動・教育観から構成される教育文化と、母親のもつ友人関係との関連を検討する。その際、母親とその親友の二者における学歴階層性に注目して友人関係を類型化する。この友人関係のタイプにより母親のもつ教育文化は異なった様相を見せることが明らかにされた。またこの教育文化の差異は、同時に地域への関与とも関連を示すことが確認される。

関係財としての友人関係の在り方によって、どのような教育環境が生成されてゆくのか。またその時、母親らが地域社会に期待するもの、期待し得ないものは何なのか。本稿は教育文化と地域関心の差異を友人関係別に検討することにより、分節化してゆく生活世界をもたらす関係財として友人関係の意味を考察する。

1．問題関心

1．1　友人関係の社会学的知見

多様なライフスタイルが並立しあう現代社会において、個々人の生活はそれぞれに自らの嗜好や趣味に照らしあわせた、より選択的でより個人関心的なものになりつつある。とりわけ都市における生活では、さまざまな情報が錯綜し、各種の商品やサービスが氾濫する状況のなかにおいて、個々の潜在的なライフスタイルの芽は、より顕在的なものとなり、ある種のシグナルを放ち合っているかのようだ。

森岡は、こうしたライフスタイルの変化について「自己実現としての私化」が他者の干渉を拒否しつつ、一方で、自己実現のために協動的関係である他者を必要とするような「意味充足志向とネットワーク志向の高まり」が生じつつあると指摘している。[森岡, 1993：28] 森岡のこの指摘は、つぎの二点にその強調されるべき点があるだろう。

＊東京都立大学大学院社会科学研究科社会学専攻博士課程
＊＊東京都立大学人文学部

ひとつは個人が生活課題を処理してゆき、それぞれのライフスタイルを形成してゆく際、個人の持つ価値意識に照らし合わせた意味や目的を獲得する過程の中で関係財の選択も行われてゆくという事。そしてもうひとつは、その関係財は個人の自己実現に協動的な関係、または「相互に自己実現しあう」関係が選択されており、こうした関係は被選択的・拘束的である親族や近隣にもとめられるよりも非拘束的・非組織的さらには選択的関係である友人関係に求められてゆく事。個々人のライフスタイルの確立にとって友人関係が関係財として持つ意味は大きい事が導かれる。

友人関係をめぐった議論はほかにも確認できる。フィッシャーは都市における第一次的関係の分節化に注目し、下位文化の生成メカニズを提示した。この下位文化理論は彼の「新しいアーバニズム論」[松本, 1990, 1992a, 1992b] のなかで展開され、都市に特有の「文化的革新機能」[松本, 1992b : 47] を説明する試みである。

フィッシャーは都市度の程度別に人々が持つ第一次的関係の関係量を測定し、都市であればあるほど人々がもつ関係が分節化し、ネットワークの選択性が増大してゆくことを実証した。[Fischer, 1982] この事実をもとに、彼は友人関係などの選択的関係の増大が、都市における下位文化の生成を可能にすると説明するのである。すなわち、村落ではある嗜好やライフスタイルに沿って共鳴し合い、行動をともにするだけの一定量の人口が獲得されないために、下位文化の生成にはつながりにくい。だがそれに対して都市の場合、多種多様な嗜好やライフスタイルをもった人間が接触し合うことを可能にするだけの人口量を持つ事から、人々は特定の共通関心に基づいた“社会的共有空間”を形成することができる。これが下位文化として成立するのである。[Fischer, 1982 : 193-201] その際、選択的かつ非拘束的関係である友人関係がここでも重要な意味をもつのである。

もう一つの友人関係をめぐる知見として、同質結合の性質（homophily）が挙げられよう。これは友人関係にある者どうしの属性に注目した議論である。つまり友人関係にある二者は、その社会的属性において同質の属性をもつ傾向が確認されているのである。この同質結合にかかわる議論は端に性別や人種、職業などのカテゴリカルな質的変数のみに見られるわけではなく、学歴や年齢、職業威信スコアなどといった量的変数においても、同レベルな二者が友人関係にあることが確認されている。[Verbrugge, 1977] さらに二者間の属性はひとつの変数において同質的であるというよりは、同時にいくつかの変数において同質的（同レベル）であることも実証されている。[Laumann, 1973] 前後するが、前述したような個々人のライフスタイル形成における関係財として友人関係も、また都市における下位文化形成の議論においても、友人関係の同質結合の性質が含まれる議論である。

1．2 問題関心

ここまで友人関係をめぐる社会学的知見を簡単に振り返ってみて、個人の社会生活の理解に友人関係が重要な意味を有することが理解できよう。本稿はこうした友人関係のもつ社会学的意味を具体的に検討するため、友人関係の同質結合の原理ならびにライフスタイル形成における関係財としての性格に注目し、次の分析課題を検討してゆきたい。

第一に、友人が同質（または同レベル）の社会的属性を持つ時、どのようなライフスタイルが展開されるのか。第二に友人の社会的属性が異質な（またはレベルに差のある）ときには、どのようなライフスタイルが展開されるのか。そして第三に友人の同質・異質（レベルの同異）の差異によって、ライフスタイルに差異がみられるのか。以上の課題を検討するべく、本稿は母親のもつ友人関係の学歴階層特性と教育文化の関連を対象として分析をしてゆく。

ここでの友人関係とは、特に母親とその親友（「最も親しくしている方」）との二者関係に限定して取り扱うものとする。さらにこの二者がいかなる学歴的地位を保有しているのかに注目し、同レベルの学歴階層の友人関係であるのか、または異なる学歴階層レベルの友人関係であるのかを判断し、友人関係を学歴階層特性により類型化する。

友人関係における学歴階層の同異により、母親のもつ教育文化の内容に差異が生まれるのか否か。また差異が認められるとすれば、それはいかなる内容の差異なのか。こうした点が本稿の分析課題の中心とされる。

先の友人関係をめぐる議論に照合させるならば、森岡が述べたライフスタイル形成、とりわけ「教育スタイル」とでも呼べる教育文化に、学歴階層特性による友人関係の同質・異質性（本稿では階層性）がどれほど寄与するものであるのかを確認する作業と言える。

また本稿では、教育スタイルがどのような地域関心を派生するのか注目してみたい。ここでも母親の友人関係のあり方、および地域がもつ学歴階層特性の差異が教育スタイルや地域関心にどのように関連するのか検討しようと思う。

1．3　分析の方法と手順

本稿で取り扱うデータは、1992年11月に東京都立大学都市研究センターの高橋勇悦教授、ならびに同大学人文学部、森岡清志助教授のもとにおこなわれた「教育と友人関係に関する調査」のデータである。調査は、東京都内の4つの地域（文京区、北区、町田市、青梅市）における住民のうち、35歳以上49歳以下の子持ちである女性を対象とした。標本抽出は選挙人名簿をもとに各地区約1200名がサンプリングされ、全体標本数4860名、有効回収票集は2306名、回収率は47.4％であった。このうち、本稿で分析対象とするのは、小学生以上の子供を持つ母親のみに限定する。したがって分析対象総数は2013名（文京区509名、北区421名、町田市571名、青梅市512名）となる。

次ぎに本稿における友人関係の学歴階層特性の設定について説明しよう。まず母親、親友のそれぞれについて高卒以下の学歴を持つものと短大・高専以上の学歴を持つものに二分し、それぞれ「低学歴」「高学歴」とした。さらにここから母親・親友の二者間の学歴的地位の組みあわせにより、「友人関係の学歴階層特性」を類型化する。したがって類型には「低学歴母親・低学歴友人」（N＝820, 42.6％）、「高学歴母親・高学歴友人」（N＝616, 32.0％）、「低学歴母親・高学歴友人」（N＝341, 17.7％）、「高学歴母親・低学歴友人」（N＝149, 7.7％）の4つのタイプが設定される。

つぎに分析に用いられる諸変数について若干の説明をしたい。本稿では教育文化を教育投資行動ならびに教育観のふたつの項目により構成されるものと考える。教育投資行動項目の具体的変数として、「本を与えた程度」「学習専門機関の利用度」「習い事数」の3項目を設定した。また教育観項目の変数としては、「学歴受験教育の是非」[1]「教育環境の選別志向」[2]を設定した。ほかに地域関心項目として「自治会・町内会総会への出席」「PTA役員経験の有無」「地域教育活動の参加」「サークル活動への加入」「居住地への永住志向」の諸変数を用いる。

2．友人関係と教育文化

母親の学歴的地位と親友の学歴的地位からなる友人関係の学歴階層類型は、母親の持つ教育文化に関連を持つと言えるだろうか。ある学歴的地位の友人を持つことが母親の教育文化にどのように関連しているのか、または関連しないのか。また友人の学歴的地位が母親のそれと一致している時、または一致していない時、母親の教育文化はどのように差異があるのだろうか。こうした事を確認するため、友人関係の類型別にあらかじめ数量化してある母親の教育文化項目を分散分析にかけた。ここで言う教育文化項目は先述のとおり、教育投資行動項目と教育観項目の2つから構成される[3]。それぞれの項目別の得点を友人関係の類型別に分散分析にかけたのが表2－1である。

まず全類型、つまり1）「低学歴母親・低学歴友人」2）「高学歴母親・高学歴友人」3）「低学歴母親・高学歴友人」4）「高学歴母親・低学歴友人」の4つの類型間で見た場合には、「通信添削利用」の項目で有意とされないが、残るすべての項目において有意と判断されている。しかしこの全類型間の分析では母親の学歴地位の差、つまり高学歴母親と低学歴母親の間の差異が強調されただけとも考えられ、友人の学歴的地位の差が反映されてい

るのかは疑わしい。そこで、母親の学歴地位別にサンプルを分け、その中でそれぞれ友人の学歴的地位の差によって教育文化項目に差異が認められるかを確認する必要があるだろう。

表2－1の母親（高）、母親（低）の列はそれぞれ母親の学歴的地位が高学歴、または低学歴のサンプルに限定した場合の分散分析結果を示したものである。したがって、母親（高）の列では「高学歴母親・高学歴友人」の類型と「高学歴母親・低学歴友人」の2つのグループ間で教育文化項目の平均をみた分散分析結果である。同様に母親（低）の列は、「低学歴母親・低学歴友人」と「低学歴母親・高学歴友人」との2つの類型の間で、教育文化項目に差異があるかを分析した結果である。では、それぞれの分析結果を確認してゆこう。

母親（高）の場合、友人の学歴的地位の差によって母親の教育文化項目に差が見られるのは「本を与える程度」と「地元志向」のみであった。詳細はいずれの項目においても「高学歴母親・高学歴友人」のほうが「高学歴母親・低学歴友人」に比べて「本を与え」、「地元以外の中学校に通わせる事を考える」といった、積極的な教育文化をもっていることがうかがえる。だが全体の項目のうち、類型の差によって教育文化と関連を示すという項目が少ない。この事は、高学歴の母親は、その友人が高学歴であろうと低学歴であろうと、彼女ら自身の持つ教育文化には大きな差を与えないことを意味すると言えよう。ここから高学歴母親の間には、友人の学歴的階層特性には左右されない確固とした教育文化が存在し、内面化されている事が推察されるのである。

一方、母親（低）の場合はどうだろう。結果は5つの教育投資行動項目のうち、「家庭教師利用」を除く4項目が、また5つの教育観項目のうち3つの項目において有意な結果が出ている。つまり、母親が低学歴である場合には、その親友が高学歴であるのか、または母親と同じ低学歴であるのかという差異が、母親の教育文化の差異と関連を示すという事になる。では「低学歴母親・低学歴友人」と「低学歴母親・高学歴友人」との間で、この教育文化の差異がどのように具体的な内容をあらわしているのだろうか。これを詳しく見ると、低学歴の母親たちはその友人が低学歴であるよりも高学歴である方が「本を与え」、「学習塾」や「通信添削」を利用し、「習い事の数」も多いという積極的な教育投資行動をしている事がわかった。また高学歴の友人を有する方が、その教育観は、「地元の学校」にこだわらず、「私立の中学校」に通わせることにも寛容で、また「子供の友人」はある程度選ばれた家庭の子供とつき合わせたいと考えていることが明らかになった。総じて言うならば、子供の教育環境に対して選別的な志向が、高学歴友人を持つ母親の間には現われていると言えるだろう。しかも高学歴友人を持つ低学歴母親の方が、低学歴友人を持つ低学歴母親に比べて、これらの教育文化のいずれの項目においても、その平均値

表2－1　友人関係の類型と教育文化項目（分散分析）

項　目	全類型	母親（高）	母親（低）	項　目	全類型	母親（高）	母親（低）
本	＊＊	＊＊	＊＊	学歴	＊	－	－
学習塾利用	＊＊	－	＊＊	受験勉強	＊＊	－	－
家庭教師利用	＊＊	－	－	地元志向	＊＊	＊	＊＊
通信添削利用	－	－	＊＊	私立志向	＊＊	－	＊＊
習い事数	＊＊	－	＊＊	子供の友人	＊＊	－	＊＊

注1）「母親（高）」は高学歴母親・高学歴友人（N＝615）、高学歴母親・低学歴友人（N＝149）の間の比較結果。
注2）「母親（低）」は低学歴母親・低学歴友人（N＝820）、低学歴母親・高学歴友人（N＝340）の間の比較結果。
注3）＊は5％有意を、＊＊は1％有意を示す。

は高学歴母親らのものに近い値を示していることも確認された。つまり、「(友人の学歴的地位の差に関係なく）高学歴の母親」＞「低学歴母親・高学歴友人」＞「低学歴母親・低学歴友人」の順で積極的な教育投資行動をとり、また環境選別的な教育観を持つと言えるのである。

ここまでを整理すると、学歴階層特性に着目した友人関係は、教育文化についてみるかぎり高学歴母親よりも低学歴母親にとって、関係財としての意味をもつと考えられる。そしてその財としての具体的な効果は、自分よりも高い学歴の友人を持つことが、より積極的な教育投資行動と環境選別的な教育文化となってあらわれていると言える。

3．教育文化と地域関心の構造

3．0　本節の課題

本節では、母親らの教育文化が彼女らの地域に寄せる関心をあらわす項目（以下、地域関心と称する）とどのような関係を持つのかを検討してゆく。母親らが持つ教育文化およびそこからの教育関連需要が、地域社会の中でどれだけ供給されニーズを満たしているのか。地域社会に対してどれだけの期待をもつことができると考えているのか。こうした教育関連需要と地域社会からの供給を教育文化項目と地域関心項目との間から考察してゆく。また地域関心項目のうち、教育文化と親和的なものと親和的でないものとがあるのか。あるとすれば、それはどういった地域関心項目なのか。またそれらを区別する規範は何なのか。教育文化と地域関心をつなぐ規範を検討することもここでの課題としたい。

上記の課題を経た上でさらに、教育文化・地域関心の関連において、地域社会の学歴階層性がどのように作用するのかを確認しよう。つまり、ある地域社会において相対的に学歴的地位の高い（または低い）地域社会構成員（居住者）が日常的に接触可能に一定量存在し、それが臨界量に達しているならば、個人個人のなかだけでなく地域社会の中にも浸透した（教育）下位文化があると考えられる。こうした地域の持つ教育文化の中において教育文化項目と地域関心項目はどのような関連をみせるのか。これが検討されるべき第二の課題である。ある特定の学歴的地位の人々が集積する地域（本稿では「高階層地域」、「低階層地域」）には各々に特徴的な教育下位文化や地域関心志向が存在するのか否か。そしてそれは教育文化・地域関心のそれぞれについて特定の方向への志向性を強化するのか、それとも特定項目のみに顕在的特色があらわれるのか。これらの点が細かく検討される必要があるだろう。

そして最後に各々の学歴階層別地域において友人関係の学歴的特性の差異がおよぼす作用を教育文化に限定して確認してゆく。前節において、友人関係の学歴的特性の差異が教育文化と関連を示すことが確認されていた。そこにはいずれの教育文化項目との関連においても、「高学歴母親（友人の学歴的地位の差異は関係せず）」「低学歴母親・高学歴友人」「低学歴母親・低学歴友人」の順序で積極的な教育投資行動と選別的な環境志向という教育観がみられたのであった。ここでの課題は前述のファインディングスが地域社会のもつ学歴階層特性のなかでどのように強化されるのか、またはされないのかを検討してゆきたい。この課題が意図するものは地域教育文化という下位文化において、さらに関係財としての友人関係がどのように作用するのかを検討するものである。

森岡の言うように、友人関係が「相互に自己実現しあう」関係財として個人の周りに布置されていることを思い起こすならば、地域のもつ教育下位文化に内包されながらも友人関係という関係財を通じて個人が形成する教育文化がいかなる方向に向かうのか。またその際、母親らは地域への関心を増すのか、否か。教育下位文化の形成を地域と個人の関係財（友人関係）の双方から検討を試みる。

3．1　教育文化と地域関心の構造

本節で用いる変数は以下のとおりである。教育文化項目は、先にも触れたように教育投資行動および教育観の二つの項目から構成するが、分析が

繁雑になるのを避けるために以下の変数について分析してゆく。教育投資行動には「本を与える程度」「教育専門サービス利用度」[4]「習い事の数」の3項目である。また教育観項目は、「学歴・受験教育の是非」および「教育環境の選別志向」[5]の2項目である。地域関心項目には、「町内会・自治会の総会の出席」「PTA役員の経験」「地域の教育活動の参加」「趣味・スポーツのサークル参加」「現居住地の永住志向」の5項目である。

以上の変数のすべてをあらかじめ数量化し、各変数の間でピアソンの積率相関係数を算出させた。結果は表3－1の通りである。詳しく見てゆこう。

まず教育文化項目の間での相関関係であるが、これらはほぼいずれの変数間の関係においても相関関係が成立する事が確認できる。しかもこれらの有意と認められた相関関係のすべてが正の相関関係にあることがわかる。言い換えるなら、本を多く与える事、教育専門サービスの頻繁な利用、習い事の数が多い事、学歴・受験の肯定、子供の環境をより選別することが互いに同じ方向に相関関係にある事になる。したがって、第一に一つの教育投資行動に積極的である人はほかの種類の教育投資行動にも積極的であること。第二に教育観変数から言えることとして現在の学歴社会や受験教育を肯定する人ほど、より高い学歴や教育内容を求めて子供の環境に選別的な志向を持つ傾向にある。それは具体的には地元以外の学校や、私立学校を積極的に選択するし、こどもの友人でさえもどこの誰とでもつきあわせるわけではなく、むしろある程度、親の選別にかなった家庭の子供とつき合わせたいと思っているのである。そして、第三に上記にみた教育観を持つ母親らは、積極的に教育投資に励むという事が言えるわけである。

ここまでで教育文化には二つの種類があると言えそうである。ひとつは教育投資行動に積極的であり、また学歴社会の認識を持ち、受験教育に肯定的などちらかというと現行する教育システムに積極的参加者で、環境選別的な志向をもつ教育文化である。いわば「英才型」教育文化と言えよう。もうひとつは教育投資行動にはそれほど積極的なわけでもなく、また教育観においても現行される教育システムにある種のさめた意識をもって積極的な参加を見せず、我が子には様々な家庭の子供と選り好みせずにつき合わせたいという教育文化である。言うなれば「放任型」教育文化とも呼べようか。教育投資行動項目と教育観項目との相関関係の構造から、こうしたふたつの相反する教育文化の存在が析出されるのである。

では次ぎに教育文化と地域関心項目との関連を確認してゆこう。まず「本を与える程度」はいずれの地域関心項目とも相関をしめさなかった。他の教育投資行動項目においては、「教育専門サービス利用度」が「町会」「地域教育」とは負の相関関係を示し、また逆に「PTA役員経験」とは正の相

表3－1　教育文化と地域関心

N＝1822

	本	サービス	習い事	受　験	環　境	町　会	PTA	地域教育	サークル	永　住
本		＋＋	＋＋		＋＋					
教育サービス			＋＋	＋＋	＋＋	－－	＋＋	－－		
習い事				＋＋	＋＋		＋＋		＋＋	
受験学歴					＋＋		＋			
教育環境						－－		－－		

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

関を示している。もうひとつの教育投資行動項目である「習い事の数」も「PTA役員経験」とほかに「サークル」の二つに正の相関を示した。このことから教育投資行動に積極的であるということは「町会総会参加」や「地域教育活動」のような地域社会に広範な関りを持つような地域関心とは相容れない傾向にあり、逆に「PTA役員経験」のような教育現場そのものに近いもの、また「サークル参加」のような私的志向でどちらかと言えば個別目的的な地域関心項目のものと親和的であると言えよう。教育投資行動に積極的である母親が地域社会全体よりも、もっと個人主義的行動に向かう傾向が読み取れる。

さらに教育観項目との関連を見てゆこう。「学歴・受験」を肯定する母親ほどPTA役員の経験が多いという正の相関関係がある。「学歴」「受験」「PTA」という三者の関係が学校を中心の核としたひと連なりをなし、三位一体の関係にあるのだろうか。また「子供の環境選択」に選択的である母親はここでも「町会」や「地域教育活動」に消極的である負の相関を示した。先程の教育投資に積極的な母親と同様に、子供の環境に選別的であるということが、母親自身の地域社会との交流を縁遠いものにさせている。

ここまでのことから総じて言える事は、積極的な教育投資行動と環境選別的な教育観から構成されるような、「英才型」教育文化を持つ母親らは相対的に広範な地域交流を促されるような活動には消極的であるが、その反面、PTA活動やサークル活動などのような個別目的的・私的志向の性格の強い活動にはむしろ積極的に参加していると言える。またそれに対して「放任型」教育文化をもつ母親らは地域全般にかかわるような町会・自治会活動や地域教育活動に積極的であり、むしろ個別目的的なPTA・サークルなどの活動は手薄であると言える。母親らの持つ教育文化の差異が地域関心の向け方にも差異を与えるという構造が確認できた。

こうした教育文化と地域関心との間の構造をふまえた上で、析出されたふたつの教育文化の持つ需要がそれぞれどのように地域社会からの供給によって満たされている（または満たされずにいる）と考えられるのだろうか。ふたつの教育文化のうち、相対的に多様、かつ活発な（教育的）需要をもつのは「英才的」教育文化の方であることがデータから説明される。ところがその需要の高さは、教育関連活動でならば地域教育活動ではなくてPTA役員経験という、ある種の局部的関心にとどまる。つまり住まいのある地域よりは我が子の通う学校への関心に向かうのである。同様に「英才型」教育文化の母親らが、町会・自治会には関心が低く、一方で自分の趣味や嗜好にあったサークルには積極的であるのも、一種の局部的関心の現われであると言えよう。誤解を恐れずに言うならば、「英才型」教育文化を持つ母親らが地域社会に求める態度は、きわめてドライに自らの欲するものは得、必要としないものには一定の距離をおくスタイルを持つと言えるだろう。逆に「放任型」教育文化を持つ母親らが地域社会に求める態度は、とりわけ高い需要志向をもつわけではなく、その非選別的な態度の延長線上で地域社会との関りも維持していると考えられるだろう。

こうした教育文化と地域関心との関連は、当然のことながらその地域がどういった居住者により構成される地域であるのかが影響を及ぼすと想像される。以下に地域の学歴的階層特性を考慮に入れ、その影響を検討してみたい。

3．2　地域階層と教育・地域関心

教育文化と地域関心との関連に影響すると思われる地域の学歴的階層特性を分析に新たに盛り込んでゆく。ここで地域の学歴的階層特性の分析的設定を説明する必要があるだろう。まず、本調査の調査対象地区4地点別に最終学歴のクロス表をとる。（表3－2－1）で高学歴取得者（短大・高専・大学卒業者）と低学歴取得者（高卒まで）の比率の差により高学歴者の多い地区を高学歴階層地区、逆に低学歴者の多い地区を低学歴階層地区と設定したのである。こうした手続きにより本調査地区間における相対的結果として、以下具体的には文京区・町田市を高学歴階層地区とし、北区・青梅市を低学歴階層地区として分析をすすめてゆく。

表3－2－1 地域×学歴

	高卒以下	短大・高専	大卒以上	
文京区	231（－－）	136（＋＋）	209（＋＋）	576
北区	399（＋＋）	54（－－）	62（－－）	515
町田市	267（－－）	156（＋＋）	210（＋＋）	633
青梅市	452（＋＋）	44（－－）	46（－－）	542
	1349	390	527	2266

注）表中の記号は比率の差の検定結果。＋＋，－－は1％有意、＋，－は5％有意を示す。

表3－2－2 教育文化と地域関心（高階層地区の場合）

N＝988

	本	サービス	習い事	受 験	環 境	町 会	PTA	地域教育	サークル	永 住
本		＋	＋＋		＋＋					
教育サービス			＋＋	＋＋	＋＋		＋			
習い事				＋	＋＋		＋		＋	
受験学歴					＋＋					＋
教育環境						－－		－－		

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－2－3 教育文化と地域関心（低階層地区の場合）

N＝834

	本	サービス	習い事	受 験	環 境	町 会	PTA	地域教育	サークル	永 住
本			＋							
教育サービス			＋＋	＋＋	＋＋		＋			
習い事					＋＋		＋＋		＋	
受験学歴					＋					
教育環境								－		

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－2－4　地区特性別にみた教育文化・地域関心項目（平均の差の検定）

項　目		平均値の比較	項　目		平均値の比較
本を与える	＊＊＊	高＞低	町会総会出席	＊＊＊	高＜低
教育サービス利用	＊＊＊	高＞低	PTA役員経験	n. s.	——
習い事の数	＊＊＊	高＞低	地域教育活動	＊＊＊	高＜低
受験と学歴	n. s.	——	サークル参加	n. s.	——
教育環境の選別	＊＊＊	高＞低	永住志向	＊＊＊	高＞低

注1）高階層地区（N＝988）低階層地区（N＝834）
注2）＊＊＊は0.1％有意を示す。
注3）「平均値の比較」にある「高」「低」はそれぞれ高階層地区、低階層地区をあらわす。たとえば「高＞低」とある場合は高階層地区のほうが低階層地区よりも平均値が高いことを示す。

さて、ここでなされるべき分析は高学歴階層地区と低学歴階層地区のそれぞれにおいて教育文化・地域関心の関連構造を確認することである。これを示したのが表3－2－2および表3－2－3である。それぞれ検討してゆこう。

まず、高（学歴）階層地区の結果（表3－2－2）からは教育文化項目間の相関は、先に確認された全体サンプルでの相関結果、すなわち表3－1のものとほぼ変わらない相関関係が存在することが確認できる。一方の低（学歴）階層地区ではどうだろう。表3－2－3にある教育文化項目間の相関関係は全体サンプルのそれと比較すると「本を与える程度」との相関などいくつか相関関係が見られなくなっている。この段階で高階層地区と低階層地区とでは教育文化項目間での相関に差異がある事が確認できる。だが、ここで問題としたい点はそれぞれの地区内にある教育文化の内容にある。詳しく見てみよう。

先に確認されたふたつの教育文化、すなわち、「英才型」教育文化と「放任型」教育文化はそれぞれどちらの地区に浸透しているといえるのだろうか。この点を検討するためには先の地区別相関関係の確認のほかに各教育文化項目の平均値を地区間で比較するのが適当であろう。そこで教育文化項目の平均値の差の検定を高階層地区と低階層地区との間でおこなったのが表3－2－4である。

5つの教育文化項目のうち「受験と学歴」を除く4つの項目において有意差を確認できた。しかもいずれの有意差も0.1％有意という高い信頼性を持つものである。さらに各教育文化項目の平均値を見るといずれも高階層地区の方が高い平均値を示した。こうした結果から言えるのは、学歴階層別に地区をわけた場合に教育文化項目間での相関は高・低いずれの階層地区においてそれぞれに確認できていたが、その内容に差異が存在することが推察できるのである。つまり高階層地区の方が低階層地区に比べて、活発な教育投資行動を、またより積極的な環境選別的教育観をもつことから、相対的に高階層地区には「英才型」教育文化、低階層地区には「放任型」教育文化が浸透しているものと判断できるのである。

さて次ぎに教育文化と地域関心との関連がそれぞれの地区においていかに展開されるのかを確認してみよう。再び表3－2－2および3にもどろう。

先の全体の結果（表3－1）では、教育文化項目と正の相関を示したのは「PTA役員経験」と「サークル活動」、また負の相関を示したのは「町会総会出席」と「地域教育活動」の項目だった。そして「永住志向」はいずれの教育文化項目との相関は確認できなかった。ここで高階層地区および低階層地区での相関表に目を転じると、いずれにおいても先の全体の結果と比較していくつかの相関関係

を成立し得なくなった箇所が見られる。また相関が確認される箇所においても相関関係の有意性は低くなっている。地区特性別にみた時に教育文化項目と地域関心項目の関連が全体的に弱化した相関関係となるという結果自体は、教育文化－地域関心間の関連に更に加味されるべき他の地域特性が存在することを暗示する。

一方、ふたつの階層地区において相関関係が認められたものについてはどうだろう。表3－1の結果と同様に「PTA役員経験」と「サークル活動」のふたつの地域関心項目は教育文化項目と正の相関を示していた。また「町会総会出席」と「地域教育活動」は先の表3－1では教育文化と負の相関関係にあったが、高階層地区・低階層地区ともに負の相関関係を示したのは「地域教育活動」の項目のみであった。「町会総会出席」は高階層地区では負の相関が認められるものの、低階層地区においては相関関係の成立が認められていない。またほかに、先の表3－1では確認されなかった「永住志向」との正の相関が高階層地区にのみ確認されている。

教育文化と地域関心の関連はそれぞれの地域ごとにどのように理解されるべきなのだろうか。これまでのわれわれの知見では「英才型」教育文化に親和的なのは「PTA役員経験」や「サークル参加」などの個別目的的・私的関心であり、また一方「放任型」教育文化に親和的なのは「町会総会出席」や「地域教育活動」などの広範な地域関心であることを得ている。また本節のなかでわれわれは高階層地区には相対的に「英才型」教育文化が、そして低階層地区には「放任型」教育文化が浸透していることを得た。とすると、高階層・低階層のそれぞれの地区別にみた教育文化と地域関心項目間の相関関係は、「英才型」教育文化の高階層地区には、低階層地区に比べてより高い個別目的的・私的関心が払われるのだろうか。また「放任型」教育文化の浸透している低階層地区には、高階層地区に比べてより高い広範な地域関心があらわれるのだろうか。これらのことは具体的に「PTA役員経験」「サークル活動」への得点の多少、また「町会総会参加」「地域教育活動」への得点の多少により確認されるだろう。

ここでもう一度、表3－2－4を参考にしよう。先程と同様に、高階層地区と低階層地区との間で地域関心項目の平均値の差の検定結果を見ると、「町会総会出席」や「地域教育活動」の項目において有意差を確認できる。その項目のいずれも低階層地区のほうが高階層地区に比べて平均値が高い。つまり、低階層地区では町会総会への出席や地域教育活動が活発であり、低階層地区が「放任型」教育文化を持つと同時に高階層地区に比べて「町会…」や「地域教育…」などの広範な地域関心をもつ地域であると言えるのである。そして高階層地区は「英才型」教育文化を持つと同時に低階層地区に比べて広範な地域関心は持たない傾向があると言える。また全体サンプルの傾向（表3－1）から「英才型」教育文化と正の相関を示していた「PTA…」や「サークル…」は地域間では平均値の差に有意差が見られなかった。これらの項目が教育文化項目と相関を示しているのは、地域間ではなく、むしろ地域内の個人個人の教育文化との相関と考えるべきであろう。

さて、最後に「永住志向」が地域間で有意な差が認められたことに触れよう。このこと自体は高階層地区のほうに永住志向が強いことを示しているが、ほかに表3－2－2のなかで教育文化と関連して正の相関を示している事を考えあわせると、「英才型」教育文化を持つ母親らが、地域的にも「英才型」教育文化の浸透する高階層地区を評価することが永住志向につながるのだろうか。この点はいまの時点で判断しかねる問題である。高階層地区・低階層地区の内部それぞれにおいてどのような母親が教育文化を展開してゆくのか。そしてそれにともなう地域関心は各地域の中においていかなる方向に向かうのか。われわれは母親のもつ友人関係の類型別にこの課題を検討してゆこう。

3．3　友人関係と教育・地域関心

ここでのわれわれの課題は高階層地区が「英才型」教育文化を、そして低階層地区が「放任型」教育文化を浸透させていることをふまえた上で、それぞれの教育文化を展開する地域のなかで母親ら

表3－3－1　教育文化と地域関心（高階層地区の低学歴母親・低学歴友人の場合）

N＝211

	本	サービス	習い事	受　験	環　境	町　会	PTA	地域教育	サークル	永　住
本		＋								
教育サービス				＋	＋＋					
習い事					＋＋					
受験学歴					＋＋					
教育環境										

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－3－2　教育文化と地域関心（高階層地区の高学歴母親・高学歴友人の場合）

N＝490

	本	サービス	習い事	受　験	環　境	町　会	PTA	地域教育	サークル	永　住
本			＋＋		＋		＋			
教育サービス			＋	＋＋	＋＋					
習い事					＋＋		＋			＋
受験学歴					＋＋					
教育環境						－		－－		

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－3－3　教育文化と地域関心（高階層地区の低学歴母親・高学歴友人の場合）

N＝199

	本	サービス	習い事	受　験	環　境	町　会	PTA	地域教育	サークル	永　住
本			＋							
教育サービス			＋		＋＋					
習い事										
受験学歴					＋					
教育環境								－		

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－3－4　教育文化と地域関心（低階層地区の低学歴母親・低学歴友人の場合）

N＝561

	本	サービス	習い事	受　験	環　境	町　会	PTA	地域教育	サークル	永　住
本			＋			＋		＋		
教育サービス			＋＋		＋＋					
習い事					＋		＋		＋	
受験学歴										
教育環境										

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－3－5　教育文化と地域関心（低階層地区の高学歴母親・高学歴友人の場合）

N＝91

	本	サービス	習い事	受　験	環　境	町　会	PTA	地域教育	サークル	永　住
本					＋					
教育サービス				＋＋	＋＋					
習い事				＋			＋			
受験学歴					＋					
教育環境								－		

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－3－6　教育文化と地域関心（低階層地区の低学歴母親・高学歴友人の場合）

N＝127

	本	サービス	習い事	受　験	環　境	町　会	PTA	地域教育	サークル	永　住
本										
教育サービス					＋＋	－				
習い事										
受験学歴										
教育環境								－	－	

注）表中の＋＋は0.1％有意の正相関、＋は1％有意の正相関、－－は0.1％有意の負相関、－は1％有意の負相関を表わす。

表3－3－7　地区特性別にみた友人関係類型間の教育文化・地域関心項目（平均の差の検定）

項　目	高階層地区	平均値の比較	項　目	低階層地区	平均値の比較
本を与える	＊＊＊	2＞3＞1	本を与える	＊＊＊	3＞2＞1
教育サービス利用	＊＊	2＞3＞1	教育サービス利用	＊	3＞2＞1
習い事の数	＊＊＊	2＞3＞1	習い事の数	n. s.	—
受験と学歴	n. s.	—	受験と学歴	＊＊	1＞3＞2
教育環境の選別	＊＊＊	2＞3＞1	教育環境の選別	＊＊＊	2＞3＞1
町会総会出席	n. s.	—	町会総会出席	＊＊	3＞1＞2
PTA役員経験	n. s.	—	PTA役員経験	＊＊	3＞1＞2
地域教育活動	n. s.	—	地域教育活動	n. s.	—
サークル参加	n. s.	—	サークル参加	n. s.	—
永住志向	n. s.	—	永住志向	n. s.	—

注1）高階層地区における友人関係別のサンプル数は次の通り。「低学歴母親・低学歴友人」（N＝211）「高学歴母親・高学歴友人」（N＝490）「低学歴母親・高学歴友人」（N＝199）
また低階層地区における友人関係別のサンプル数は次の通り。「低学歴母親・低学歴友人」（N＝561）「高学歴母親・高学歴友人（N＝91）「低学歴母親・高学歴友人」（N＝127）
注2）表中、平均値の比較の列内の数字はそれぞれ友人関係類型をあらわす。
1「低学歴母親・低学歴友人」　2「高学歴母親・高学歴友人」　3「低学歴母親・高学歴友人」
注3）表中の＊印は平均値の差の検定結果を示す。＊は5％有意、＊＊は1％有意、＊＊＊は0.1％有意をそれぞれ表わす。

個人個人が自らの友人関係を通じていかなる教育文化を、またさらには地域関心を維持しているのかを検討することである。

われわれはすでに本稿の第二節において、母親とその親友との間の学歴特性により類型化された友人関係が、教育投資行動および教育観と関連をもつことを確認してきた。そしてそこには「高学歴母親（友人の学歴特性は関連しない）」「低学歴母親・高学歴友人」「低学歴母親・低学歴友人」の順に、より積極的な教育投資行動をとり、またより選別的な教育観をもつことも確認されていた。ではこれらの友人関係をもつ母親が、高階層地区に居住する場合と低階層地区に居住する場合ではどのように彼女らの教育文化に変化がおこるのだろうか。そしてその変化は地域関心にもなんらかの影響を及ぼすのだろうか。これらを検討してゆくために、先の高階層地区・低階層地区別にみた教育文化と地域関心の関連をさらに友人関係の類型別に区別して考察しよう。表3－3－1から表3－3－6がその表である。[6]

まず高階層地区のなかでの教育文化と地域関心の関連を友人関係別に見てみよう。（表3－3－1～表3－3－3）教育文化項目の関連のうち、最も相関関係を多く維持しているのは「高学歴母親・高学歴友人」の表3－3－2である。特に「教育環境の選別」が他のいずれの教育文化項目ともかなり強い正の相関を示している。一方で「低学歴母親・低学歴友人」の表3－3－1においても教育環境選別の教育観項目と他の教育文化項目は強い正の相関を示している。こうした教育文化項目間に多くの相関関係が維持されていることから、これら二組みの母親らは同様に鮮明な教育文化を維持していると言えるが、果たして両者の教育文化の内容は似通ったものなのであろうか。それとも互いに

相反する教育文化を展開しているのだろうか。これを確認するために、友人関係類型別の教育文化項目の平均値の差の検定を用意した。表3－3－7はその結果である。表の左側の列の結果を見ていただきたい。これによれば、高階層地区内で母親らの教育文化項目の平均値は教育観の1項目を除いてすべてに高い信頼性の有意差を確認できる。次にその平均値を高い順にならべると、どの友人関係類型が最も積極的な教育投資行動をしているのか、また最も教育環境を選別することに肯定的なのかを判断できるだろう。さきの平均値の差の結果をあらわした列の右となりに、平均値の多い順に類型（番号）が記されている。すると平均値の差に有意差の認められた項目の全てにおいて、「高学歴母親・高学歴友人」が最も各項目の平均値が高く、ついで「低学歴母親・高学歴友人」「低学歴母親・低学歴友人」の順になることがわかる。つまり「高学歴母親・高学歴友人」が最も積極的に教育投資をし、また最も教育環境を選別する志向をもつのに対し、「低学歴母親・低学歴友人」が最も教育投資に消極的であり、また教育環境は現状維持のままでよいと考えているのである。この考察を先の表3－3－1および3－3－2のそれぞれの相関関係の高さに照合させて解釈するならば、相対的に「英才型」教育文化が地域的に浸透している高階層地区において、更によりすぐりの「英才型」教育文化をもつのは高学歴の母親らであり、地域の「英才型」教育下位文化の担い手であると言える。彼女らの住む地域自体には「英才型」の教育文化が地域の教育下位文化として存在するが、さらにその中でも子供の将来に高度の教育が必須条件であると考え、それ故に教育にお金をかけることを厭わず、たとえ居住地から離れても良い学校に通わせてやりたいと考えるような「英才型」教育文化を鮮明に具現化させている。

逆に低学歴母親は低学歴の友人を持つことによってさらに教育投資や教育観に積極性が見られない傾向にあり、表中の正の相関の強さは低学歴友人を持つ低学歴の母親等の「放任型」教育文化が高階層地区において相対的に強化されている事を物語る。そしておなじ低学歴母親の場合でも彼女らの友人が高学歴のものであれば、「放任型」教育文化を形成するほどの教育文化項目間の強い相関関係には至らない。低学歴の母親らにとって彼女らの友人が母親同様に低学歴であるとき、「放任型」教育文化という、言い換えれば教育面への関心の低さが強化されているのである。

ではあわせて地域関心項目を見てみよう。「高学歴母親・高学歴友人」の表では教育文化項目と正の相関を示すものに「PTA役員経験」があるのに対し、「町会総会出席」や「地域教育活動」などには負の相関がある。特に「地域教育活動」への負の相関関係は著しく強いものであることがわかる。これは彼女らの教育文化への意識の高さが、決して地域社会の広範な関心とは結びつかず、ただ学校関連の局部的な関心には注意が向くが、それはあくまで我が子が通う学校であるからであり、地域教育などのような人様の子供まで面倒をみるような辛抱強く息の長い関心ではない事を物語る。だが、その一方で居住地としての地域に対する評価は教育文化項目と肯定的関係にある。「永住志向」項目に正の相関が現われている事は、高学歴の母親らが教育関連財を獲得するのにこの高階層地区が有利であるとか、または地域的にも彼女らのもつ「英才型」教育文化が成立していることが住みごこちのよさをおぼえさせるのだろうか。「永住志向」項目への正の相関が高階層地区のほかの友人関係類型のなかで確認できないこと、また表3－3－7で友人関係類型別にすべての地域関心項目に差が認められないことは、逆に母親らのもつ教育文化の差異が地域への関心や評価の差異につながっていることを説明すると言えよう。

では次ぎに低階層地区における友人関係類型別の教育文化および地域関心を検討してゆこう。表3－3－4から表3－3－6がそれにあたる。低階層地区そのものは相対的に「放任型」教育文化が浸透している地域であった。そうした地域的な教育下位文化のなかで、個々の母親らが友人関係を通じてどのような教育文化を形成するのだろう。まず3つの表を比較してみて気付くのは「低学歴母親・高学歴友人」の表における教育文化項目間の相関が非常に少ないことである。唯一相関関係が

認められるものは「教育専門サービス利用」と「環境選別」教育観の間の正の相関のみである。ほかのふたつの表では確認される相関の数はほぼ同じであるが相関する項目自体には多少の差異が見られる。まず、「低学歴母親・低学歴友人」の場合、受験競争や学歴社会の是非に関する教育観項目(「受験」)をめぐってひとつも相関があらわれていない。このことは先の「低学歴母親・高学歴友人」においても同様である。低学歴の母親にとっては受験競争や学歴社会の評価からは自らの教育文化の形成はなされないのだろうか。だが、表3－3－7の「受験学歴」の項目を見ると、ここでの平均値の高さからこれらふたつの類型が受験や学歴を教育システムの一部として肯定的態度であることがわかる。こうした「受験学歴」の評価が存在し、一方でほかの教育文化項目と相関しない事は、低階層地区の低学歴母親にのみ見られる傾向である。彼女らは学歴が子供の将来を決定し、受験勉強がこどもの成長にプラスであると考えはするが、それは一般論として考えるのみであり、教育観として内面化されておらず、彼女らに教育投資行動をおこさせないし、教育環境を選別して子供に提供してやろうとも思わないのである。そしてこうした教育に対する態度の違いは「放任型」教育文化をもつ低階層地区であるからこそ、そのなかで形成されている特殊な態度であると考えられる。

では低階層地区における教育文化の内容をそれぞれの地域関心と織り混ぜながら検討してゆこう。先の表3－3－7をここでも引用すると、まず教育投資行動項目「本を与える程度」「教育関連サービス利用」のふたつの項目に友人関係類型別の有意差が現われている。そのいずれの項目においても最も投資行動に積極的なのは、「低学歴母親・高学歴友人」の類型であり、最も消極的なのは「低学歴母親・低学歴友人」の場合である。とすると表3－3－6で「低学歴母親・高学歴友人」には教育文化項目間の相関の箇所はきわめて少なかったが、各項目の内容は積極的なものであることがわかる。これをいままで確認されたような「英才型」教育文化というには、あまりにも他の教育文化項目間の相関関係の成立が少ない事は歪めない。だが高学歴友人を持つ低学歴の母親らが教育サービス機関を積極的に子供に提供するのは、自らの親友にも高学歴の友人を選択するのと同様に彼女らが、社会的上昇移動にある種の媒体の必要性を認める姿勢とも考えられる。だが彼女らの目的に沿った媒体の獲得は、低階層地区の中では必ずしも容易でないように推測される。そのことは表3－3－6にもどって、教育文化項目と地域関心項目との相関からも裏付けられる。教育文化項目と「町会総会出席」や「地域教育活動」などの広範な地域関心を喚起する項目が負の相関を示すことは、ほかの表においても今まで確認されてきた。だが、ここで更に注目しなければならないのは、教育文化項目とは正の相関を示す傾向にある「サークル活動」の項目において、ここでは負の相関関係が成立していることである。つまり教育環境に選択的であろうとすればするほど、地域活動には参加せず孤立化してゆく傾向がある。このことは高学歴友人をもとめ、また子供にも積極的な教育投資をするような上昇志向が低階層地区においては満たされていないことを意味するのだろうか。

さて、先程表3－3－7において最も消極的な教育投資行動に止まっていることが判明した「低学歴母親・低学歴友人」について考察しよう。表3－3－4では教育投資行動項目間で相関が見られるが、その内容はさきの表3－3－7から友人関係類型間のうち最も消極的であることが判断できる。また「環境選別」教育観の項目でも最も消極的で現状維持的な立場にある。これらのことから「低学歴母親・低学歴友人」の教育文化項目間の相関関係は低階層地区内において相対的に低い得点どうしにより成立する正の相関関係であると言える。つまり教育文化としては「放任型」教育文化が展開されていると言えよう。彼女らは地域的にも「放任型」教育文化が浸透するなかで、さらのその文化を維持・促進するような主体なのである。こうした彼女らの関心は地域のなかでどのようにあらわれているのだろうか。表3－3－4にある地域関心項目と教育文化項目との相関結果を見ると4つの項目に相関関係が現われ、いずれも正の方向であることが示されている。しかもその中には教

育文化項目とは負の相関関係を示す傾向にあった「町会総会出席」や「サークル活動」なども正の相関を示すとある。つまり教育文化、具体的には「本を与える程度」や「習い事の数」の2項目においてより積極的に教育投資がされれば、広範な地域関心も、より局部的な関心も高まる傾向にあると言える。低学歴の母親らが自分と同様に低学歴の友人を得ることによって形成される教育文化は相対的には教育関心の低い「放任型」教育文化であるが、その教育文化とあらゆる地域関心が正の方向に相関を示すのは、言い換えれば教育にも積極的な母親は地域活動にも積極的であり、また逆に教育に消極的な母親は地域活動にも消極的であるという「積極派」と「消極派」がこのなかに存在することを表わす。が、なによりも自分も親友も低学歴であるこの層の特色は教育的・地域的関心の双方がひと連なりに関連しあうライフスタイルを展開していることであろう。

最後に低階層地区における「高学歴母親・高学歴友人」の教育文化および地域関心を検討しよう。まず、教育文化項目間の関連では教育投資行動間にひとつも相関関係がみとめられなかった。相関が示されたのは教育投資行動と教育観項目のあいだ、また教育観項目相互にのみであった。教育文化を構成する項目の間でこうした偏った相関分布を示したことは何を意味するのだろうか。その解釈にはやはり彼女らの居住する場が低階層地区であることが影響するものと思われる。先に低階層地区における3つの友人関係類型のうち、教育観項目どうしで相関関係がみられるのはこの「高学歴母親・高学歴友人」のみであると確認した。ここから彼女らは「放任型」教育文化が浸透するこの地域においてもほかの類型の母親らとは別に、確固たる教育観を内面に確立していることが推し量られる。おそらくそうした内面の教育観の確立には自分自身も、また親友も高学歴者であり、長期にわたる過去の学歴獲得の経験を通じて教育がかくあるべきだという確固たる教育観を形成できるのだろう。そしてこの教育観項目と教育投資行動が相関を示すことは、低階層地区内であるという制約をうけながらも、彼女らがみずからの教育観に従ってある程度の教育投資行動を試みているものと言えよう。だが教育投資行動間に相関がうまれないのは、地域周辺の教育関連資源が充実していないのか、または地域のもつ「放任型」教育文化がこの高学歴母親に影響を与えていると言えるのか、その両方の解釈が成り立つだろう。そして自分自身の内面にある教育観を行動面において具体化できるほどの環境を持たないこの低階層地区に対して、高学歴の母親らの関心は低くならざるを得ない。表3－3－7の地域関心項目のうち、有意差を示した「町会総会参加」および「PTA役員経験」で、高学歴の母親らが最も消極的な関りしか保っていないことが示されている。低階層地区において高学歴の母親らが維持している確固とした教育観は、この地域社会のなかでは実質的行動として具体化されることもなく、また、かといって自ら積極的に地域社会に貢献して新たな土壌を作り出そうとするわけでもなく、むしろ彼女らの居住者としての姿は、関らずに済むのならそれで済ませてしまうような消極的なものであると言えよう。

4．結語

われわれは教育文化とそれに関連する地域関心の考察をつうじて、母親の持つ友人関係がとりわけ低学歴の母親にとって意味を持つことを確認してきた。その実態は低学歴の母親らが自分と同じ低学歴の友人を親友として持つよりも、高学歴の友人を親友とする時に、より積極的な教育投資行動や選別的な教育環境を好むというものであった。

友人関係の差異が教育文化と関連を示したことは必ずしも高学歴の友人が、母親の教育文化に影響したというような因果的な位置関係を示すことにはつながらない。より積極的な教育文化を選好する母親だからこそ自分の親友にも教育的経験の豊かな高学歴友人を選んだのかもしれない。その逆もまた然りである。だがここで本稿の目的は友人関係と教育文化の間の因果関係の究明にあるのではない。母親らがその友人に低学歴の者と高学歴の者のどちらを選んでいるかが、彼女らの教育

文化の差異と関連するという、その事実自体がどういった帰結をもつのかが検討されるべきであろう。

先に森岡が述べた友人関係の意味は、個々人のライフスタイル形成において「相互に自己実現しあう」ための一種の資源である、関係財として位置づけられていた。たしかに本稿の分析を振り返ると、個人の教育文化を「教育スタイル」というライフスタイルの一部と考えれば、低学歴の母親にとって彼女らがどういった教育文化（スタイル）をもつのかという問題は彼女らの関係財としての友人の属性差と対応していた。この事実からは関係財として友人関係のもたらすものが存在する事が実証されたと考えて良いだろう。そしてその帰結として、友人関係財の属性と個人のライフスタイル、そしておそらくはそれぞれのライフスタイルがもたらす種々の社会的地位までもが、ゆるやかに連動していることが考えられる。

友人関係という関係財をめぐっていかなる生活世界が展開されるのか。そしてその結果いかなる社会的地位の獲得が可能となるのか、関係財としての友人関係をめぐる実証研究は教育スタイルの面のみならず、今後ライフスタイルの多様な局面において分析される必要がある。

最後に本稿の分析で扱われた地域関心について触れておきたい。分析の結果は、第一に、地域関心項目が教育文化項目と関連を持つこと、さらに第二に、その関連のしかたは一様なものではなく、教育文化と親和的な地域関心と非親和的な地域関心とがあることが判明した。このことは地域社会を語る際、一枚岩的な居住者像がもはや成り立たないという認識とともに、従来まで展開されていたネイバーフッド・モデルのコミュニティ・パラダイムから脱却する必要を明示していると言える。すなわち、従来まで一定範囲の空間内における居住者をひとくくりにしたものが地域社会の単位であったのに対し、さきの第一点の知見からは、居住者ひとりひとりのライフ（教育）スタイルによって地域への関心の向け方は一様ではないことが示唆される。また第二の知見からは、個人のライフスタイルが地域社会に投影されるとき、地域社会が内包するものは一様な価値や意味を放つものではないという点である。本稿の分析結果において、町会や地域教育活動には参加しないが、PTAやサークルには参加するといった地域関心のスタイルが教育文化との関連で成立していたように、地域社会のなかには個々のライフスタイルに沿って利益的なものと不利益的なものとが混在していると言える。そしてその混在のなかから個々の居住者は自分に必要なものを選びとっているのである。「ネットワーク型コミュニティ」[森岡, 1993：31] や「コミュニティ解放仮説（Community Liberated）」[Wellman, 1979] といった新しいコミュニティ・パラダイムが提示される真意はここにある。

友人関係という関係財を通じた多様なライフスタイルの展開は、分節化してゆく生活世界の解明につながるひとつの重要な鍵となるだろう。

注1）「学歴受験教育の是非」の項目は二つの質問文、「学歴（の将来決定）」と「受験勉強（の評価）」に関する問いの回答を得点化したものである。このふたつの問いはそれぞれ相反する意見のうち、どちらかに近い意見を選択してもらうものである。各問の選択する意見は次の通りである。まず、「学歴」に関する問いはa「子供の将来の生活は、学歴によってかなり決まってしまう」、b「子供の将来の生活は、学歴とはあまり関係がない」。つぎに「受験勉強」に関する問いは、a「受験勉強は、子供の精神的成長にとってプラスになる」とb「受験勉強は、子供の精神的成長にとってマイナスになる」である。選択される意見を得点化する際、「学歴」「受験勉強」のそれぞれの問いでaの意見に近いものに高い得点を与えた。

2）「教育環境の選別志向」の項目は三つの質問文、「地元志向」「私立志向」「子供の友人」に関する問いの回答をそれぞれ得点化したものである。各問ごとの選択意見は次の通り。「地元志向」に関する問いはa「子供のためには、地元の中学校に通わせる方が良い」、b「子供のためには、地元以外の中学校に通わせる方が良い」。「私立志向」に関する問いは、a「義務教育の段階でも、公立以外の学校を選

ぶ必要がある」、b「義務教育の段階では、公立以外の学校を選ぶ必要はない」。「子供の友人」に関する問いは、a「子供にはいろいろな家庭の子供と広く付き合える環境がよい」、b「子供には、ある程度選ばれた家庭の子供と付き合える環境がよい」である。選択される意見を得点化する際、「地元志向」の問いではbに「私立志向」ではaに、そして「子供の友人」ではbの方に高い得点を与えた。

3) ここでいう教育投資行動項目とは「本を与える程度」「学習塾利用」「家庭教師利用」「通信添削利用」「習い事数」の5項目である。また教育観項目とは「学歴（の将来決定）」「受験勉強（の評価）」「地元（学校）志向」「私立志向」「子供の友人」の5項目である。

4) ここでいう教育専門サービス利用度とは先に教育投資行動の項目であつかわれた「学習塾利用」「家庭教師利用」「通信添削利用」の3項目の得点を足し上げたものである。

5) 注1）注2）に同じ。

6) 友人関係の類型は全部で4類型であったが、以下の分析に用いるのは「低学歴母親・低学歴友人」「高学歴母親・高学歴友人」「低学歴母親・高学歴友人」の3類型に限定する。ここで「高学歴母親・低学歴友人」の類型が分析から除外された理由は、母親が高学歴である場合にはその友人が低学歴でも高学歴でも、彼女らの教育文化項目に差異が認められないことが確認されていたために、「高学歴母親・高学歴友人」または「高学歴母親・低学歴友人」どちらかを選択することにした。その際、類型別のサンプル数の少ない「高学歴母親・低学歴友人」（高階層地区でN＝88、低階層地区でN＝55）のほうを除外することにした。

参 考 文 献

Fischer, C. S.
(1982) To Dwell among Friends : Personal Network in Town and City, Univ. of Chicago Press

Laumann, E. O.
(1973) "Bonds of Pluralism－The Form and Substance of Urban Social Networks", John Wiley & Sons

松本 康
(1990)「新しいアーバニズム論の可能性－パークからワースを越えてフィッシャーへ－」『名古屋大学社会学論集11号』
(1992a)「新しいアーバニズム理論」『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房
(1992b)「都市はなにを生み出すか」『都市社会学のフロンティア2－生活・関係・文化』日本評論社

森岡清志
(1992)「都市社会の構造的分化と都市生活の分節性」『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房
(1993)「都市的ライフスタイルの展開とコミュニティ」『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会、9-32.

Verbrugge, L. M.
(1977) "The Structure of Adult Friendship Choices", Social Forces no56., pp576-597

Wellman, B.
(1979) "The Community Questions", AJS no84. pp1201-1231

Key Words（キー・ワード）

friendship（友人関係）, subculure（下位文化）, life style（ライフスタイル）, relational goods（関係財）, community interest（地域関心）

Mothers' Friendship and Educational Culture
: Study on Friendship as Relational Goods

Noriko Tateyama* and Kiyoshi Morioka*

* Tokyo Metropolitan University

Comprehensive Urban Studies, No.52, 1994 pp. 79-97

In this study, we analyzed the association between mothers' friendships and their educational culture, which is composed by investment action and ideas on education. At first, we set the friendship type by the educational career of the mother and her friends. Then we found the association between certain types of friendship and certain educational culture. In addition, we found another association between certain educational cultures and community interest.

How dose the difference of friendship result in educational culture ? And moreover, what does the mother expect of the community, through her educational culture? What can she not expect from the community? We interpreted the meaning of friendship as an asset which can make a significant difference to life outcomes.